日刊工業新聞
年月日 16 07 12 ページ 26 NO.

不撓不屈

ふとうふくつ

主力製品と社名 変遷

人力車から乳母車、そして高齢者の自立歩行を手助けするシルバーカーへ。1930年に創業した象印ベビーは、子ども向けから高齢者向けへと、時代の変遷とともに製品を変えていった。現在の主力はシルバーカー。ピンクやゼブラ柄、ギンガムチェックなどシルバーカーに鮮やかな布地を使い、消費者の心をつかむ。目指すのは、心がウキウキするような製品づくり。社長の宮城潔は「高齢者の生活の幅を広げていきたい」と強調する。

象印ベビー ①

人力車の職人

同社の86年間の歴史を振り返ると、これまで2回の変革期が訪れている。第1の変革期は人力車から乳母車、第2の変革期は乳児向けの製品から高齢者向けのシルバーカーへの転換だ。71年に同社のシンボルマークの象とベビー用品からとって、現在の社名になった。そして次なる第3の変革期は2017年に訪れ、社名を「ウィズワン」に変更する計画だ。

「祖父の友三郎は人力車の職人だった」と語るのは先代社長で潔の父である現監査役の宮城猛。しかし自動車の登場で人力車は衰退の道に。そのため象印ベビーの源流となる企業を30年に創業した猛の父・卯三郎は、人力車ではなく乳母車の生産に乗り出した。41年には大阪府東住吉区で工場を立ち上げた。

召集・疎開で離散

「福沢諭吉が西洋から日本に持ち込んできた」。日本における乳母車の歴史は福沢によって始まったと猛は語る。移動手段として一世を風靡(ふうび)した人力車が下火になると、大阪付近の人力車の職人は、こぞって乳母車に飛びついたという。同社もそんな中の一つだった。

戦後再出発 乳母車けん引

しかし宮城家にも戦争の影が忍び寄る。42年に卯三郎が軍に召集された。45年には猛が岡山県津山市の工業学校に疎開する。終戦後の49年、新制工業高校を中退した猛は父の卯三郎とともに、ようやく岡山から大阪に戻ることに。「一刻も早く大阪に戻りたかった」と猛は振り返る。

好景気に乗る

一家は大阪市内の自宅近くにクギ工場の一部を借りて、乳母車の製造を再開した。その後、資金繰りを何とかつけて土地を購入し、再び自社工場を建設。54年6月にミヤギ工業所を立ち上げた。卯三郎が社長に、猛は専務に就任した。

卯三郎・猛父子が大阪に戻って間もない50年に朝鮮戦争が勃発。その特需で大阪は空前の好景気に沸いた。第1次ベビーブームも重なり、乳母車は飛ぶように売れた。再出発は順風満帆。新製品を作っては売るを繰り返し、同社の基礎固めをしていった。（敬称略）

▽所在地＝大阪府東大阪市御厨西之町1の5の4、06・6788・8928▽社長＝宮城潔氏▽従業員＝25人▽設立＝54年（昭29）6月

今はシルバーカーが主力。歩行器もおしゃれに

無断転載・複写禁止 ㈱日刊工業新聞社